

【随筆・父の思い出・母の思い出編】

父と子の絆

北海道で小学2年生が行方不明になり、6日ぶりに無事保護されたが、無事に親元に生還されたことが何よりである。

私は児童が無事発見されることの願いと、捜索の経緯を見守りながら、厳しくも溺愛してくれた我が亡き父親との幼少時代の拘わりを思い返し、一面、自分が父親になっての我が子との幼少時代の拘わりを思い出していた・・・

人生における親としての子育ての拘わりの期間は長いようで実は短いものである。この思い返せば短い歳月に我が子との拘わりに心血を注ぐものであるが、楽しくもあり忙しくもあるが何物にも替え難い日々であった。不思議に親としても心身ともに充実しているものであって、何よりも我が子の笑顔を見ると疲れはすっ飛んだものだ。

かつて亡き父が私に注いでくれた慈しみを、私も父親として我が子に注いだが、父親の「しつけ」はあくまでも慈しみがなくてはならないものであり、千差万別なこのことを何人から干渉される筋合いは更々ないし又干渉してはならない。

亡き父との思い出は、父と子だけが知るやるせない思い出もあれば、楽しい思い出もある。然しこの何れの思い出の中に今尚我が父は鮮明に生きている。私が生きてる限り、私の心の中に生きているものであるからだ。このことは、多分私と我が子の関係も同様であろうかと感じている・・・

父と子の絆は人生の航跡として当事者のみ知るに足るもので決して見世物ではない。

平成28年6月5日記す